

# 途上国の声を反映させた政策の実現を



ジョセフ・E・スティグリッツ

経済学者

グローバリゼーション改革論の  
主唱者として知られる、ノーベル  
経済学賞受賞者、ジョセフ・E・  
スティグリッツ・コロンビア大学教授。  
大国主導のグローバリゼーションが  
開発途上国の貧困拡大や通貨危機の主犯  
であると厳しい批判を続けてきた。  
2002年に発表した「世界を不幸に  
したグローバリズムの正体」※は38  
か国で翻訳刊行される世界的ベスト  
セラーとなったが、米国の政策運  
営に携わり、世界銀行の上級副総裁  
で務めた人物による告発は話題を  
呼んだ。

「先進国は弱者の声を聞くふり  
をしつつ実際は何もしてこなか  
ったのではないか」と訴える彼  
に、国際社会が今後果たすべき  
責任、そして日本の役割と来年  
発足する新JICAへの期待につ  
いて聞いた。

(続きは裏ページへ)

※原題 “Globalization and Its Discontents”。

## 「日本だからこそ果たせる特別な役割がある」

経済学者

### ジョセフ・E・スティグリッツ

Joseph E. Stiglitz

1943年アメリカ出身。コロンビア大学教授。マサチューセッツ工科大学で経済学博士号取得。イエール大学、プリンストン大学、スタンフォード大学などで教鞭を執り、世界の37大学から名誉博士号授与。93年よりクリントン政権下で大統領経済諮問委員会に参加。97年より世界銀行上級副総裁兼チーフエコノミスト。2001年「情報の不完全性」に伴う市場の分析にてノーベル経済学賞を受賞。著書に『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』（徳間書店）、『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』（徳間書店）など多数。



photos by Imamura Kenshiro

グローバリゼーションにより、世界の距離は大きく縮まりました。情報の交換や通信が容易になり、資本・サービス・物資・知識・人の国境を超えた移動が活発に行われています。近年の中国やインドの躍進はこうした恩恵もたらしたものとイえるでしょう。

しかし一方で、経済至上主義とグローバリゼーションの巨大な波が生み出したひずみは、国家間、国家内において、貧富の差を拡大させています。本来、成長で得た富は持つ者から持たざる者へと流れるべきですが、皮肉にもグローバリゼーションによって貧困層が食べ物にされる構造が助長されているのです。例えばアフリカでは、植民地主義が終焉した現代においても間接的な搾取が続いており、多くの人々が教育、技術、資源を手にする事なく取り残されています。

その背景の一つとして、先進国に一方的に有利な金融や貿易システムが挙げられます。巨額の債務に苦しみ、金利の上昇や為替の動きに振り回される開発途上国は、常にさまざまなリスクの矢面に立っています。また、経済協力開発機構（OECD）諸国が途上国からの輸入品に課す平均関税率はOECD内での貿易に比べ4倍にもなります。さらに、援助の裏で、途上国は貿易制限によって開発援助総額の3倍に当たる負担を課されています。こうした公平さを欠く構造により、途上国は身動きが取れなくなってしまっているのです。

他方、先進国は知的財産保護を名目に途上国の知識へのアクセスを大きく制限しています。環境問

題では、問題を引き起こす先進国とその影響を受ける途上国という構図は一層顕著になっています。

私はグローバリゼーションそのものを否定しているわけではありません。問題は、一部の国や人々のみが恩恵を受け、それ以外の者が弊害に苦しむという現状に見られるように、その方法と管理する体制にあります。これまでは、政策の根底にある市場原理主義的イデオロギーにより、経済的価値がほかの価値観を飲み込み、弱者の声は無視されてきました。今後は、こうした暴走を止めるために、政策に途上国の声をきちんと反映させ、民主的な意思決定プロセスを尊重していく必要があります。また、民営化や市場の自由化は慎重かつ適切に進めなければなりません。それ以外にも、途上国の立場に立った貿易構造の確立、市場アクセスの確保、債務の帳消し、援助の増大と効率化など、取り組むべき課題は多く残っています。

日本は、自身が発展を経験し経済大国になった貴重な経験を持つ国です。これまで世界平和や貧困撲滅に前向きに取り組んできましたし、今後も特別な役割を果たしていくことは間違いありません。

来年の新JICAの発足には期待しています。さまざまな援助アプローチを包括的に組み合わせ、同時に活用することが要求される近年の開発援助において、今回の統合は大きな意味を持つでしょう。日本の発展から得る教訓は多く、新JICAは途上国でどんな政策が最も効果的で、どう適応させていくかを支援する過程の中で、極めて重要な貢献ができると思います。